

地域を支える 変える 高知大⁴

2024年 創立75周年

8500万年前の琥珀に入ったコケ



「おまん：新種じゃないかえ!?」と目を輝かせる片桐知之講師 (写真はいずれも高知市曙町2丁目の高知大学朝倉キャンパス)



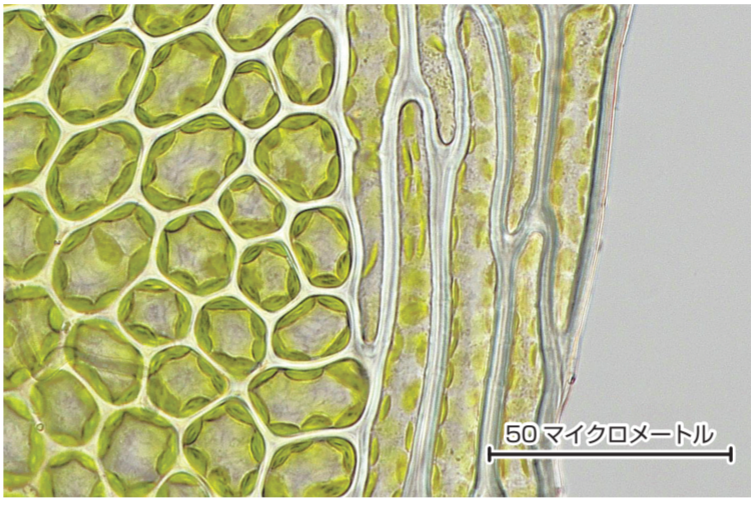
理工学部植物分類学研究室 片桐知之講師

このコケ…新種じゃないかえ!?

コケの種類は世界で2万種、毎年60ほどの新種が見つかるという。ただ、国内で種類を正確に判別できる研究者は10人以下。その1人が理工学部にいる。植物分類学研究室の講師・片桐知之さん(39)。「高知は元々コケ研究が盛んな土地。もともと脚光を浴びてほしい。コケの魅力と高知での展望を語った。」

研究最前線

コケ植物(蘚苔類)は三つに分れてきて、葉が丸い苔類、葉が丸い蘚類、葉がないツノコケ類があります。国内の現生種は約1900で多くは体が1センチ以下。種同士の違いも非常に微妙です。例えば神社の境内での調



コケの細胞を顕微鏡で調べ種を特定

査で、見た目が同じに見えても研究室で調べると10種ほど見つかることもあ。特定には似た種類の標本と見比べる必要がある。細胞一つのサイズが5μmに達するだけで種が変わる場合もあり、1種調べるのに数時間は当たり前。判別が他の植物の比にならないほど困難で、若い研究者が増えないのが悩みなんで

ただ、大先輩の先生方が手間を惜しまず標本を収集してくれたからこそ、種の特長がわかる。昭和のころはコケ研究を「今は役立つしない」と言っていた大先輩もいたそう。近年は特定のコケが創薬に活用できたり、重金属の廃水から金を回収できる能力が分かったり、実用化の課題はあるようだが利用が模索されています。また、コケをガラス容器で育てる「テラリウム」が広い世代で人気になっています。これだけ注目を浴びると驚きますね。僕の仕事は標本の管理と、種類を正確に判別すること。かなり地味なのは自覚しています。行政の環境調査などで種を特定する傍ら、国内で生育す

る種約1900に変わりがなく注意するのも大事な役割。地道な仕事の中で、15年間で新種を九つ発見し、五つの種を国内で初確認しました。

現生種以外に、琥珀や化石に閉じ込められた太古のコケも研究対象です。2010年ごろから始め、うちの科を発見。そのうちのひとつは、形から国内に分布するフタマタゴケ科の一種と思いましたが、現生種にない特徴があり新種と分かりました。8500万年前の琥珀の中にあつたので、コケもその時代と分かります。

高知大着任は2021年12月。以前は宮崎県にある世界で唯一のコケ専門研究所「服部植物研究所」の所長でした。高温多湿な高知はコケの生育に適している。越知町の横倉山や安芸市の伊尾木洞も有名なスポット。今、日本ではコケ研究者が減っている。コケの分類学を学べる大学は高知大学を含め二つを残すのみ。責任が重いんです。

コケは5億年前、地球上で初めて陸上に進出した植物。恐竜のずっと前に誕生した生物ですが、今もまだ生き残っている。何より未調査の場所がまだまだ身近にあるんです。コケなら高知でも新種発見の可能性が十分にある。植物分類学に残された最後のフロンティアと言えます。

牧野博士の弟子の資料も

標本庫にコケ8万点 国立大2番目



高知大学植物標本庫に収められたコケの標本

朝倉キャンパスにある高知大学植物標本庫には約8万点のコケ標本があります。1953年から収集が始まり、今年が創設70年。一貫してコケ専門の研究者が管理を続けていて、国内外の大学や博物館と標本の貸し借りもします。国立大では2番目の収蔵数。その中には牧野博士のまな弟子でヤスゴケ科の研究で知られる上村登・理学博士(1909〜93年)の標本もあります。上村博士は、牧野博士の勧めがきっかけになり、当時遅れていたコケの研究を始めたそうです。また、上村博士を指導した吉永虎馬(1871〜1946年)は佐川町出身で、日本苔類学の創始者と言われています。シダ植物を研究していた兄が牧野博士と幼なじみだったこともあり、東京の牧野博士に佐川の植物を頻りに送るなど晩年まで交流していたそうです。高知はコケ研究で重要な研究者を多く輩出した土地。県指定文化財に吉永先生が発見したサカワヤスゴケがあります。コケを原レベルで指定するケースは全国でほほほは、高知のコケのポテンシャルは高いです。

絶賛活動中

女子バスケットボール部



インカレ全国大会に出場した女子バスケットボール部のメンバー

時に楽しく 時に厳しく練習中

経験者を中心に本気でバスケットをしたいメンバーが、時に楽しく、時に厳しく練習をしています。私は昨年12月まで、部員13人のキャプテンをしていました。

上下関係なく意見を言い合うのが特徴。少人数の構原で小中高とバスケットをしていた私にとって、先輩ってあまり意識しなかった関係。それでも人柄のいい先輩に恵まれ、気兼ねなくプレーができました。

昨年10月のインカレ四国予選リーグでは、引退するメンバーともっと試合をしたい、との思いで一気に、延長戦を僅差で乗り切り、本大会初出場を果たしました。ただ、全国大会では1勝もできず、レベルの高さを痛感しました。

今年の目標は、まずインカレ出場、そしてインカレでの1勝です。ユニホームも一新します。スポンの裾には、みんなで選んだキツネのエンブレムが。小柄な私たちが強豪校に太刀打ちするには「バスケットQ」が必要。素直が持ち味の私たちに、賢いキツネのように相手に合わせた戦い方をしていくことが次の課題です。(長山実樹=教育学部4年)

推しスポット

物部キャンパスの良心市



物部キャンパス内にある良心市。「高知大学」と記された米を紹介する筆者(南国市物部乙)

学生が愛情込め栽培

物部キャンパスにある良心市を紹介します。正門入って右手の大きな農林海洋科学部1号館、玄関を入ったところにあります。学部生が実習で作る米や野菜、果物が並んでいて、少しか安く買えるので助かっています。一般の方も購入できますが、あまり知られていない隠れた名店です。

とはいえ、今の時期は品薄のようで、米しかありませんでした…。5*で1800円。ついこの間まで文旦や小夏が販売されていたんですけどね。5月からは梅、6月からは桃の季節だと思えます。

そして、忘れてはいけないのがハウス栽培しているトマト。糖度別に販売されていて、中には12、13度のものもあります。秋以外は並んでおり、とにかく甘くておいしいので、ぜひ一度味わってほしいです。

毎年2年生が実習するんですが、暑い中も土にまみれて作業したのは、いい思い出です。先輩が愛情たっぷり込めて作った自慢の農作物をご賞味ください!

(竹島一輝=農林海洋科学部4年)

◆第4土曜日掲載

高知大学 × 高知新聞 共同編集